

吟野集

春下

土岐文庫
文庫17
W46
2

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

文庫 17
W46
2

雨催花 雨中花 雨後花 夕花 夜花
煙荔花 閑夜花 深衣花 曙花 朝花
花不逐日 花不忘歸 鄉花 山櫻 遠山櫻
深山櫻 山花 山花盛 滿山花 望山花
花深山氣色 遠山花 深山花 今花入山語 山路花
霞陽山花 莎山花 今花入山語 今花入山語 山路花
山莊東落 頭花 今花入山語 連峯花 仙花
杪花 古溪花 今花入山語 繢花 仙花
行路花 國路花 今花入山語 繢宿花 仙宿花
水三花 水邊花 今花入山語 繢宿花 志賀山城
湖邊花 海邊花 今花入山語 繢宿寫水 仙滿洞水
河上花 池上花 今花入山語

春下目錄一

昭和六十年二月一日
土岐善吉贈
唐氏寄

010185194863

閑居花
都^一花
社頭花
花交松
依花待人
花苗客
花友
驚聲^{驚方}
來花下
花忘君
花使
花下
驛花
老賞^老
花在處老
花主
花宿
花根
花枝
玉梢
花色

隣花
禁庭花
花所^二
竹間花
竹間花
依花待友
依花待客
山花苗人
行人留花
尋花會友
尋花會友
花前興
對花耽老
花忘愁
花便
花木
花本

望花
古京祀
松間花
柳邊花
家花勝他花
花時客來
花時客來
花下惜友
花下惜友
櫻狩
尚萬會

田家花
故鄉花
古宅花
花陽松
家花勝他花
花時客來
花時客來
花時客來
花時客來
山家花

花匱
花鏡
花被
心花
花手向
花易散
年^二惜花
雨中惜花
纏見落花
落花漫
落花滿山

花与春匱
花浪
花摘
花面斂
掉頭花
花半落
惜花經年
老人惜花
惜落花
落花堆
落花處々
落花翁
落花堆
落花處々
落花翁
落花滿山

花露
花淵
花苞
花形見
花欲移
花將散
無風散^三惜花
對月惜花
畫夜惜花
替身惜花
惜落花
落花處々
落花翁
落花處々
落花翁
落花滿山

花錦
花錦
花顏
花形見
花將散
花麻
花嘶稀
貴賤惜花
對客惜花
惜花切
落花翁
落花處々
落花翁
落花處々
落花翁

苔上落花 山蹊落花 落花滿山路 行路落花 開路落花
名所落花 水上落花 落葉浮水 河上落花 滯落花
湖上落花 海邊落花 禁庭落花 古宮落花 故鄉落花
驚窓落花 庭落花 落花滿庭 夜庭落花 闌庭落花
見花不採庭山庭落花 田家落花 山寺落花 社頭落花
曉落花 朝落花 舊有落花 夜思落花 夢中落花
內前落花 風前落花 落花隨風 風後落花 雨中落花
雨後落花 落花似雪 只花不殘 花落枝頭 見落花
落花散衣 花落頭 落花笛客 花落客稀 孤花
思殘花 殘花 花僅殘 遠尋孤花 殘花風芳
霞藏殘花 闺角花 寄花離別 花前別人 寄花懷

在前迷像 寄花迷憶 花是幽思 花惟懷舊 在前懷舊
寄花懷焦 寄花神祇 寄花釋教 花氣無常 寄花無常
見花觀物 花祝 寄花祝 花有喜色 花佳色
花色齊久 花契萬年 花契逐年 花契長香 每春花芳
年之花珍 逐年花勝 花思來年 花思來世 花自有情
心在花 春情寄花 春惜生花 花時心不靜 入道更花
花駭忘心 花不延思 花不言志 對花思西 花如舊
依花忘家 花有遲速 花未忘 雜花 野遊
野遊至暮 春日
春眺望 海上春望 湖上春望 水鄉春望 春日望山
山中春望 旅中春望 二月
二月宴 曲水宴

桃花

牡丹

董

雨中董

野董

故鄉董

荒砌董

古宅董

摘董

蛙

澤蛙

川蛙

井蛙

田蛙

水邊蛙

夕蛙

夜蛙

名所蛙

苗代

山田苗代

雨中苗代

寄苗代述懷

安^{アシ}一^ヒ

躑躅

浦躑躅

水邊躑躅

山躑躅

巖上躑躅

岡躑躅

夕見躑躅

山振^{山吹同}

思山吹

山吹咸

翫山吹

折山吹

岸山吹

河邊山吹

水邊山吹

山吹寫水

水底山吹

山中山振

島山振

里山吹

幽居山振

故鄉山振

山吹散

葵子花^{カキツバタ}藤花

紫藤

雨中藤花

月吊藤花

幽栖藤

隱處藤紀

禁處藤花

池邊藤花

水上蘿花

水邊蘿花

蘿下蘿花

岸蘿花

浦蘿

蘿上蘿

藤懸松

藤花悬松

森森

翫藤花

藤花翫松

松松

藤花久

藤花年久

藤花散

暮春

暮春待人

暮春藤花

藤春

暮春兩

暮春風

暮春霞

暮春殘花

暮春日

水鄉暮春

川暮春

暮春鶯

暮春雲

暮春月

名所暮春

幽居暮春

惜暮春

暮春述懷

暮春幽思

惜春

年已惜春

依花惜春

寄花惜春

老人惜春

兼惜春

惜春不駐

惜春未一

惜春逐年

殘春

殘春日少

春殘二月

歲時春尚少

又發生於晦日

三月盡

三月盡夕

三月盡夜

惜三月盡

三月盡花

江邊之月盡

海路之月盡

行路之月盡

故鄉之月盡

山家之月盡

閏二月盡

二月盡迷懷

春風

山春風

春嵐

春天象

春日

春電

春煙

春露

春夜

春夢

春夕

春朝

春山

春山春

每山有春

春嶺

春松

春野

春野它々

春行路

春闌路

社鶴春

都春

里春

故鄉春

春洞房

春山居

春山家

山家春興

春陽家

春田家

春田

春川

春毫

春江

春海邊

春橋

春磯

春海路

春水路

春池

春池浪靜

春浪

春危巢

春植物

春木

松添春色

松有春色

芦筆

春獸

春鳥

春魚

春央

春人

春主

春心

春意

春聲

春色

春香

春浦

春橋雜物

春杖

春車

春舟

春夜

春取見

春芭

春旅

春愁

春燕行

旅春雨

春遠情

春还懷

春思

春懷舊

春釋教

春神祇

春手向

春祝

春山里尋人

春人事

止宿

二
內

三月閏三月

蝶花

晴花

朝宗
花すなはとひのうを取るわく、小説もその
代この種の物語の風ふう何うば花代菊うらはと見てかうと
同
りうえど妙わらき小まくはる花の匂ひ多是と
後持
とく人わざ小へあくべし稱ちてゆり一春一ときれい、立候置

お紫万葉
首をハ就ひとせう。木叶小ゆ。ハ花の名をも。
詞少。江水と人あ。ばくま。も。人。流は。も。と
お。古里の暮。まく。銀角。し。純。春。ま。く。花。が。た。と
ノ。有。だ。と。よ。ま。わ。も。ぬ。し。極。や。も。ゆ。り。ま。く。
後。系。種。全。有。い。も。ゆ。り。ま。く。花。が。た。と
日。櫻。小。も。ゆ。り。ま。く。花。が。た。と。義。本。叶。小。落。の。じ。く。落。も。
さ。度。業。生。花。不。忘。飯。小。落。い。く。以。後。不。ぞ。内。大。臣。

山櫻 野花

野花

山櫻

遼山稿

隱山稿

卷之二

高くばひるをとまくやわうるれじかくせんに ひ世
うりもくに國の春ともし種おぢて取まのあすくまち
万見ワセバ青日はせ小蘆もく美匂はまく花うを 朝仲
嘗てのゆせどどふうそえへ御すかうの風ぞ吹きまふ 朝霞
山の上人山主あね櫻花いあくす体を覺つて 朝霞
挂春衣たれぬそとそ衣さうもどふわくねく桶を 朝霞
わゆゑを表せまよくもく花めりふりととむ 朝霞
吉江の春おもむくやく年をのゆくを減らぬ日を 朝霞
全江口と遼江多み小豆久ほへらずとつす桶やうす 朝霞
挂入一束ひゆく粟、うちも又あらと謂を収もととむ 朝霞
河く家風様えもえもひき桶ハ花小野れまく 朝霞
子もゆて花萬すや萬の風と桶はまろとひが 朝霞
代行く花木八角れひ花うちを絶の名まれ之芳也 朝霞
同 朝霞

王氏

清山客

孫山花
望江志

代もが風の吹きあをひくの音となりてづく
祠をまとうかさすに古地のち野の氣配も
チ古跡じるの事小あればじきの附見に案の
代の先づる山は御手柄を此山をうちえ
ゆゑ(也)、稀とぬそくをうきまつて山の山
の上にて花火盛はゆるやうにどから
ほし梅候物時事もむきし峰火も多々おぼら
吉(吉)梅被度(度)よりの山のひとうもゆる也
代もあつたまうまくい務處のよからず
精(精)くじゆゆをとめこえゆくと、極へてえをゆる
代根とて本ほくの移る事御神社といふ事
おほきをひねり、め事(事)多くいはとれとりて御神社
全(全)くもむうとう候らまうまくのあら春日かくするに書

後頭包為葉
圓位後東方
讀人不識乃方之
脫猶八也長能
り上△系極か後忘極
ち無尤

遠嶺射

連峰射

幕玉

松花

古漢花

旅客見忘

羈馬花

旅宿忘

野鶴

代

蘭鷺花

鳥所空

蘭鷺花

鳥所空

千の内にうきもの園と之をむけしもるよまひる奈
あふ場や桜の花とくふかをうゆの枝ひ
後山のいづきのじけ桜の花のどくどくちうどくば
月不つうのうの桜花うとそん草花うとぞうに
於桜花ニ葉のひらはわはなもとくもとくわくと
日花のえいうちとくはうはうの影やうわくと
後石上かる壁の桜花うとてけるはもとくはうと
桜花うとけのうふるひのうたどくの桜ニ葉り
代はくさやうかうの桜花うとくはうとくはうと
代はくさやうかうの桜花うとくはうとくはうと
代はくさやうかうの桜花うとくはうとくはうと
代はくさやうかうの桜花うとくはうとくはうと
代はくさやうかうの桜花うとくはうとくはうと

春雲山園

鹿鳴山園

水と舟

代都のうみの波見うせばをくの候く花楊小

ク相

生峰はうきの花の峰を立田の小倉の峰小花う

空家

生峰はうきの花の峰を立田の小倉の峰小花う

檢政左衛

生峰はうきの花の峰を立田の小倉の峰小花う

檢人不知

生峰はうきの花の峰を立田の小倉の峰小花う

國厚

生峰はうきの花の峰を立田の小倉の峰小花う

朝

生峰はうきの花の峰を立田の小倉の峰小花う

後

高立

後
あくまぬ人をとて桜花がひよそせてさむ
金
冰のさすかむほひ花がさるどりぞゆせれん
相
此の訂正は櫻花がひよそとてさむ
後
名のひよそひもとくにじゆく花のさむりや
後
物がひよそりあひ浅色とゆくぞ花の色ひええ

月 桃花の花は根はゆゑひを
古する。木の花とて、それより不被やや達
る氣写能
月 繰あふうる。影の花をやすらぎも花へえてす
月 乾清と花の境とえやうのどかさりるるのよ
日 花の小花はむかへ花へて花をひそむす。右のあ
御四事 桃葉ひづれの花はもて花をめりと望のく。右
代えさきをさきむれの花葉を葉の浦ゆきむわ
日 月をいはまの浦よ船をいはもの花はも
浦をいはまの浦よ船をいはもの花はも

代をまつて川のうへ
日暮れもひそかに花ふともすじ川のほん
川渡りもくねる小川いもと消えかかる
花はるに叶へ川のりのまつやども有りふ
金治の度てはり花漫々とわづかのまつを
手年どじたけのけのや（楊柳）とくまもとてごく
ひのけの風あまきそ流のまくら感うちれ
動搖れうるせの歌うれ流くとくもさざわら
代謡があるけのれいにこのうき歌とじやのむか
月みはき花の邊とくとくうぐいのまくら
後櫻とくとくもやうなどひの花の邊のもくら
金音をひく音ひどく歌あるもよのむらとく
ゆきさきのゆい茎とくも花小まくらわら

定家
國石
詠大和
嘉河院
後山
南隱
院德勸
金燈
西園寺入道
口之文
室子
村家式部
穆津
嘉見

居れど様のことを云ひ乍らのねはれ
居れどそのものゆゑにせば、ふ前のこと
自らの黒い顔をさとて、ひそかに見られ
る。後輩がわざわざあやまるなれば、白い顔
代りぬくふるひよつまち黒ふもぎの花園わらうと
日ひえをかどりわらうわびたまの花もひどくわらうと
日ひおひのまつ着たとば數ばの内に、まとも
日ひあるのを、ひとれやうに、あらすき葉ふくらみ
日ひ出でまよわきの様もひまくわらうと
日ひ

史記
留侯論

卷之三

後
極矣。人すれぞの様をいひぞうめどりて
はともあり。もとまば梅花とよへば、そひちや
千葉宿花も昔ふとよむやきをいたじらるを
代わる。さへまづはるやうに見衰しきのもや高
神事のまゝひもとぞるのゆゑとえる。

或子博祝王
為東△
後人知
通假
易犯
國墓
傳補

卷之三

花蜜が糞のうぶれをされば、其のゆゑに氣
力がふえ、もろみの福氣もちらりとかかる。後成
後つまよやかふれぬすへ、そこ一本、小日向市もあ
る。氣源もどりとてのねの花あそきうち、花は糞よれ
糞もはのどく、少しお花枝さく、灰松のうす
けり、とおわの疊よづらをのみ、くわね花まよわ
月見草、小波ざくらをやま紫まだの梅さくしむ
月見草の尾との花や、枝や、ねば、まとまゆる、大浦
代りのもの梅が見え、をばねえを花の段まよえ
代りアセバねば、小波すら、遠い梅度すこす
花の石も、とてひきく、とくの花よ、玉扇
わく、花や梅の花は、小波ぞ、むじ実の秋ひし
めふえぞれへ、むすむ青梅のうじく、あそひ花を
柳原

家之勝他否

依舊待以

依稀待汝
依稀待汝

日
春ぐひよきの極まものにちゆらひてそれ
一めえるありてふと桜花をみましりてちばちば
梅花ちばらうじもどもつまむじのまくす
日
ゆかぬわかふるのむほる花はれてくる
後
君の極のまくらすとお花の香りとも起
日
はなはこくふくらむ花はりともちよ
後
とあんと紫へのさくへ花の香りともがく
日
さとおなそやさ花がふくとくくとくとも
日
せふ花がわるとあとのあわがよどまく
後
千ちすむららねば桜是れむよりよ枝をあん
後
まくらはわすとよどく人いはすく事あは
わらわのわでひくくと様をあともあく汝
古
多きを白くわゆの脇あらはふとよく汝
古
多きの見えづらふくとあく汝をあく

蓋澆
名爵
耿正
之文自立
家宗
雅通
或工詩聖
鄭姬

花作事直

金
わざなは花代友と色を以てもう度のまゝいが、は大臣

幕末

代走のあざとひやけの花をも前からぞすむれと後接
一とくふうとひよもあももうれびとくくみへ花とけ

國信
墓後
草葉
九条大下

孟子真

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ
花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

也実
佐藤左衛門
元輔
也次
佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

鶴村

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

花作事直

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

花作事直

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

老見解

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

熟語取扱

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

尚齒會

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

否忘考

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

老見解

花代の花の例や々々もじ者もかの匂ひきしが
後接の花のわらひんせとくくみのよ

佐藤左衛門
佐藤左衛門
佐藤左衛門

卷之三

花もん草

第
四

卷之三

花木
花木
花木
花木
花木
花木

花のまよとひら枝、東をばうつてまよくまひう
本のいはれととがとひまよるくふかねじかひ
代たうへ本のいはれとまよれ花あやしゆじ
收れのまよれひづらすげと新く花のまよ
ほのをひくとあらんく福後玉手びあら社をまよ
六をのをひくと社會ともるものを内もゆくぐれ
金銀ふゆる花のあらぐくびのせうとほくま
月ほくはうまえゆすく福いわくね枝がくは
銀のね枝がくれがく福家だと水ふわぞおと
金の花の精小枝くせちくのをひくとまよ
代あめと枝ひええどく福花のわらひふくとあわせ
代のあめと枝ひええどく福花のわらひふくとあわせ
年どふくとれふくとれふくものもよわんと
素性

卷之三

代
萬葉のとき春のやまとひづれの事かわらんこも
御室
りあへ

卷之三

卷之三

水浪

梅氣もあゆる風の色あはれある見先小波を立ち
立葉吹くにさへかかへば少々増してと青根波立葉の風
日立の風の風煙わざわざあるけむじき
筆深

卷之四

卷之三

卷之三

あまくとまわる梅の紅葉小花の枝のやれやれ
白いさくら 中流右

花
稿

通鑑

卷之三

卷一百一

水經

萬葉やまのまくらひそすさうり花の後を後

津絃

故見事

經國

否麻

後久我蟲

花手向

後久我蟲

拂院

惜花深遠
費銷精勤
年々擴充後孫
年々而て花もとから少しく少しおとど
秋の如くにあれば、花をば花のぬるを乞うる
継ぎありとまふ、あそち花は多くはよもやものゝともいせ
代よりとある花はすれど年々へとくらべて花のとくさういふ
年々へとほんまきわへ極艶ちふたごとくめくら
金毛とふとす、極の花あれば叶むいはくまくら
代人志とぞわざとひきひき花もかわもかんば
わゆりてつねふよのえじ極艶とびくそもじあく
わゆりてつねふよのえじ極艶とびくそもじあく
對有情亦
益義將再自
對宗時志後
對子擴充前
對子擴充大補
後嗣のあくまでもかくまくまく

卷之三

卷之三

魏晉書

惜花切
得失
風雨
晴

代風かくら風は拂ひよふ達ひ又こも風をつる

題家

日者とあきらめうば楊花もの漫のゆきとくと
金綱まといわぐかくもとくしむり花ふかじ初見

賞子ほ程

日はれくちと花ふかすとわとくとよと風

九章あは下

日右壁ふわがふ諭る花むのとくとおへ後や今う

九章

後風の拂ひぬとひ御みうらあやの花のとくと風

五絃

千シ楊ち小ちとくちと花じふとくと風

色房

日わとく小神あくらばあ花のとくとくと風

宋國

日とくとくと花津都すとおわのゆく風やう

七命

代風かくら風は拂ひよふ達ひ又こも風をつる

題家

日シ楊ち小ちとくちと花じふとくと風

七命

日わとく小神あくらばあ花のとくとくと風

七命

代風かくら風は拂ひよふ達ひ又こも風をつる

題家

日シ楊ち小ちとくちと花じふとくと風

七命

代風かくら風は拂ひよふ達ひ又こも風をつる

題家

日シ楊ち小ちとくちと花じふとくと風

七命

山風雨

春下十五

卷之三

卷之三

楊氏萬葉

卷之二

山海經

萬象山
山海經
山海經

代
楊花もあふれ渡さんを立まくはてせのやま
金白きとゆはえて楊花ちいぶ林の事とれ
綾草小ちる楊花のぼれまふ又漫花とあづら
自
楊花まのりとふくらむちよがわと風のうそ
代
本のうの草の隠ひえぬまくやあくると楊花
古
代
花楊ものじの草とふあく夜よあざく
代
後
楊花うほのうじば頃くわがわちわざと花
代
花わくえやとあまういきいきとも草のひま
代
千秋のうる木草の山坂の岩の小林とね花ひま
代
花うきば山とあすきの山楊
代
花はもちね先ふとあかきとあか
代
花をとくもの里と山とあかきとあか
代
楊花三葉のめぼれはもとあれも清とよこ
代
みよし光ひ花のむらんがちりをれゆれ

後法性寺
伊通
空林
宣德
海城
朱文
劉子
諱人
朱之
長山
都保
內
義宗
復生
良才
觀音
釋鑒
禪峰

卷之三

卷之二

河上公

卷之七

卷十六

釋量
煙信
解因
「」
宋範
賴政
中庭入方
鍾左大臣
吉昌以卒
予太政大臣
鈞宜
秀

卷之三

卷之三

舊約全書
舊約全書

弘相
鐘食志大ト
家子郷
多角
後人不
宗于
也
り能
之志
長志
季能
惠國
弘相
鐘食志大ト
家子郷
多角
後人不
宗于
也
り能
之志
長志
季能
惠國

10

卷之三

卷之三

南史

魏國

卷之三

卷之三

卷之三

後鳥羽院

四

花香傳意
夜雨驚雲
萬象新奇
山花落盡
因歸舊業
山寺蕭索
社瓦蕭瑟

曉霞集

卷之二

元補
越名
信宗
南學
舉之
魏因
系極于異旨
合而為複政
多生也
宋純
達保以繫
後鳥羽院

在山中
夏夜
月夜

金
家が小臺はもほし梅苑はひくらりと
古きもの、じぶ小緑るといはるの内か、此ぞもる
代のものあるをの月影よもほしの色ももる

隆原

風雨之居者

卷之三

金
象が小臺はもほじ梅鉢るは仰りてからく
古
者もて身の少い小移るといまの内がれをもる
代のものとあるもの月影よもほじむれの毛もひ
月をうけ中風也涼すくあらわる氣の輕きを
月
梅鉢るもと月影ふるそとく風もゆくや
野
あまく氣の糸やわらぎの山嵐ふとく峰の
月
見せよとわらぐともれのちとく葉ゆくもくち
月
ひきうち梅鉢内みれそとく風もゆく
久
くのえり風もくじゆくとく風もゆく
金
梅鉢ある風の音あきあきを小波を打つ
移
室もくへふ波ごとくのれいふまをもく
代
う風のうちの梅鉢ふきあらわきの壁
月
涼風して心の音の音とよれいふまをもく
月
あらわきの音ふきふき臂小浦ね壁の音も

医者
心地
えほね
身もと
併通
たよてき
あはれ
精神

雨中簾花

通親黑主兵易皇乞
陸人子急降季承均
公達人急急急急急

花之序

桜小へらのまきとまくまく御おみかる紀かへあへど

代だいおちの桜さくらへ風かぜふむとねわをうんと年としとらそ

高麗

えも

萬葉校こう編ひん

見花集

後京極

讀よふま

萬葉散家

萬葉鏡

日

か將

萬葉鏡

萬葉鏡

永実

付實

萬葉鏡

萬葉鏡

益光

讀よふま

萬葉鏡

萬葉鏡

定圓

具空經

萬葉鏡

萬葉鏡

墓後

殘花

萬物列人

寄花懷

思慕懷

春在堂

有感思

かく不ぞよひとよらむとて而ちあはれ候人を等せば
内山福之介を社かきを爲ひゆんとてひそまうり
齊々なればすもあらず、ほづるる見ゆるま
わゆるる事といひくといほの事あらずと
夢の中ひちひひとひとひとひとひのとひの
仕事よどきとひとひとひとひとひのとひの
後年じよふはせうの事の事とひとひとひのとひの
花の事も高ひ著の事とひとひとひのとひのと
千秋の事も下すや極る情意をや極めよし
後年じよふはせうの事の事とひとひとひのとひの
あざと何と何ととひとひのとひのとひのと
極る事も下すや極る情意をや極めよし

萬物懷旧

再獲懷旧

寄神祇

代
物を供するの事と云ふ事也

後奈若

寄神祇

年、小物を神の御前へ供する事也

白山

寄神祇

年、小物を神の御前へ供する事也

助

寄神祇

年、小物を神の御前へ供する事也

裏道

寄神祇

年、小物を神の御前へ供する事也

守光

寄神祇

年、小物を神の御前へ供する事也

高井

年々花陰

詠

年々花勝

詠

年々花陰詠春と見る花をどどり咲く年は年をも
年々花勝詠年々花を重ねて重ねて楊の花の葉が漬けたわらをひき
代告人のひよをひる楊花いくつへ年かえだるる春
代春を小極きん新つゝひよ年かえだる花をあわ
月にはば詠て枝葉の楊花又かく年をも見て月を

否思甚年
否自有情

詠

否思甚年

詠

否自有情

詠

否思甚年
否自有情

詠

春種寄送

詠

春種寄送

詠

春種寄送

詠

入道見事

春下二十二

圓生へ

千葉ももむけいを送りま。桂元とて立人。小
田代田代
わざとく。春日とよひ。おもねり。青葉の山。水
底良
後後
草の木。火の木。桂元とよひ。金之助。缺因。

國學圖書館

新編
卷之二

卷之三

卷之三

卷之二

秋も又あんまりひどくは暖かまじいばかり
方の木の花小も大きめに、ハモリの後の方
月 檜の花もひびき、さりとてわへ
花下多幸 承均
花の内に落葉が、人を心地よくする
纏毛でさうもんへゆきよし
足經

物語れどもかくね物すがよとされまどわき
月見傳月見傳のいとくらむね徒徒もまことひらきりとく
仁和は聖

伊綱

對答思西

卷之三

卷之三

仁和院
伊綱
侍大臣
時忠
佐久
鳥羽院
薦言
安達
爲時
後醍醐天皇

春下二十三

郭子思

聖經

あらぐまふるは極てすよ、まほほんをかくもあらず
日暮處ちとぞおひゆうまへおらんとよのと
月はるの時からとこゝどりまくらきはまくが
全かとぞ歌のはまうごとふをとぞうむるをかきえわ
いたれまだうせ、かみのあくがむじむらきとくわ
月も白壁へまくとまもとままみはまうめうあ
桂も香る背の歌よと渡らまことあるがむくわくと
代もさうべいさぎの時ふをうとあるはくくわくと
歌よどりもとぞひまねの歌を歌ひのまく
ちあきふれまの歌を歌ひのまくと
物

原同

代の事もあくまでもう少しは記憶に残るであつた
が、さあどうぞお読み下さい。お読みになつては、
おもひ出でます。おもひ出でます。おもひ出でます。

10

卷之三

為元
原陽

卷之二

卷之二

卷之三

武子傳

卷之三

勅
彦々松浦の沖から北上するものと云ふが、
千絆波の沖過るを渡せば彦々の沖の沿岸
わづの海へ彦の沖から北上するものと云ふが、
海よりまことに

卷之三

わよきのひ數々くもくらへ
れんじゆくとくにまつり
れ鄉を坐す。

後漢書

之を以て其の事に付する者を曰く、菊池の清内
日後又は後と云ふ者を曰く、銀波の萬葉、八百の後
立ててはる處の事は、もとより楊の足と云ふ事
同

通史
秀能
讀人不盡

後二年夏
六月廿四日
晴蓮
至之
家
武昌望

お内を生
落葉のまゝ紙へ紙へとせば風もすれぬの後
根も葉も小さく枝のとこから花は咲かずあひすゑ
月から人を重う思ひせよちぬるぞかせこゑづせむ　家待
月はうきは天河のむすめとぞまへれすすみに
身ゆきれ因

ハタチ
アラシ
カミツレ

桃の花が頃てさへせば、春もすくにとての後
信もともかく、桃のとくらはるは、あひすみを
うながす
身のまゝを、すこしも、むづちぬき、むかせこゑづくせん
月から、を、すこしも、むづちぬき、むかせこゑづくせん
日ゆき、さくは、川みまき、と、えまく、ひ、花の種くわ
日、益ぐどると、はくせん、たゞ、かく、流る、花はせん、ぞ
すの園、ひすく、の花下、くるな、かく、くわ
桃の、一時程、そらうり、れ花ぢれ、けくよし、じくらる
後、金
後桃
あくまく、み代を、うき、桃花、とれ、とくらげ、も、ほねば
日、三千、て、うち、る、ゆ、は、ま、と、く、を、く、る、名、有、絶
刀の、花、あそ、べ、わ、よ、き、と、く、や、く、の、も、む
右の、花の、わく、す、ば、い、く、ふ、荷の、と、く、と、く
ら、う、ぐ、あ、我、う、花、ひ、も、く、ふ、年、ひ、お、く、ぞ、候
代、天、う、く、み、代、の、う、く、ふ、わ、ひ、三、年、の、候、不、候、桃、の、も、む
日、二、年、小、う、く、桃、の、う、く、ゆ、う、花、候、不、候、桃、の、う、く
桃、の、う、く、ゆ、う、花、候、不、候、桃、の、う、く

いえ
さうな
來持
れ因
院憲△
家持
後今
久輔
花山院
東吉
出羽舟
舟方之
堀川
完形

卷之三

三門侍

苗代のう牛ゆきよびのとるへちふすをとく年
月苗代かせとよとしと人世根きのくま小川のあよむる

忠度

金ひどのか西の小川のきくろふとまのあいせぬ日だに
月ひどのか西の小川のきくろふとまのあいせぬ日だに

津波

自姓のゆがせつもとねととお小まみといと絶代とさき
月姓のゆがせつもとねととお小まみといと絶代とさき

李子純

秋とれべ小田のもととまあるや苗代か山をすとせ
月秋とれべ小田のもととまあるや苗代か山をすとせ

勝率

金ふくらめ苗代か山をれあぢくろ名ゆも海にゆる
月ふくらめ苗代か山をれあぢくろ名ゆも海にゆる

金房

百儀影のあらはれと照りてふまゐあぢの花は神されな
月百儀影のあらはれと照りてふまゐあぢの花は神されな

秋ほくじわとぞえとせふきとひそくのまうとく
月ほくじわとぞえとせふきとひそくのまうとく

義孝

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

忠保

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

下野

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

又弓

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

義重

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

義重

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

義重

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

義重

秋まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと
月まくらはれの浦のうをふくじの花はちゆくと

山室鑑

鶴山次
鶴山次

落しゆの花のうち小井よりてば黒べ小さりあづきこれ
ふしそつもあんとらうじゆの花の茎小わらするや
代か花のすへどあるよ花の威い人のとく
日暮くそくはの姓やとくじかのときうかふ
掛ねよどく説てぞよひゆの花ふひのうちひゆと
一束をふわぬをいとくにまわる山峰のを
内壁をきえひきれどひゆの花ふひの先をほたふ
代うれゆうとえがうのをいとまきお別ひゆのを
折山次
裁山次
内連山次

恵基
後人ま
えあ
れ植
え捕
モ能
スフ
墓後め
肥後
根植
厚基王
順
後基
ミ子

鶴山次
鶴山次

落都ぐもとむくじゆ峰わづみ井のうちの花
金波くもくづむくじゆ峰のうちうづまや唐木くわく鏡
浪くちくふゆきくじゆ峰のうちわく井のうち
千にすれまとどくらじゆの花のたりをそのうち
山峰寫水
れ鹿山次

革や
讀人ま
提政左下
定經
花燭
高達
國信
種山

島山次

甲子

出五山次
瓦鄉山次
山中山次

高
山
集

卷之三

山川故

カキツバタ

伊
序

同人集

為易

卷之三

後案

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

100

卷之三

卷之三

卷之二

西
游

卷之二

卷之二

國學

基後

卷之三

後漢

卷之六

吉
ツ、事小進むべし。其の外の事は
医、心也ど深く。又、其の外に
日、家事の外れし事の如きは、
考

行極

乙
五

卷之三

南齊書

卷之三

題作
空手
為葉

諸君請看
林小鹿蘇東坡
也色殊

おもむかのやと見えりと有のを匂ひがゆふらう
絶びゆるまのわし、いきよしんや難のよまとあらの難波
落葉またの内からぬものもととのをぢやまくらる
金丸まへせんぐれんが暮れあらはせめをぞとま
けふしうねのもひえ小紫の波とくらふ海にふうち

趙厚
能宣
國章
祐家
經信

卷之三

下

卷之二

桂の花の香りは、秋の匂いをもつてゐる。桂の花は、秋の匂いをもつてゐる。

卷之三

三

卷之三

橋上尋春

唐書

山川

卷之三

後
あはれも空くさかやかな峰のまゝかの舞
金盞の花粉とて东海のとれのばく小さる舞波
動くの向ふて岩の舞衣をわたりて人波へとく
らがさざなれ清瀧川の吹きいは風とくらは
すさみ浦の底へりは舞波とくらそりて
日へまくはるひてあはだの浦小狭の舞と一色にあ
はれふる舞衣をもどる波とぞえ
代へよむねる舞衣とくらのをのせたゞる
妹のふくさの舞衣とせんもとあらと
松風のそん浪へおもてをかづくわらと舞の舞波
は松のえの舞衣をもとねのせたゞるが
金盞の花あらはる舞衣をばうがさうとせんへ候る
はまのまのあら不思の花あらはるねじゆき江舟
年とどくねねねねをくらむかくはの舞

100

卷之三

卷之二

是爲天子

散菊子

卷之三

金松とちも見てあくまで暮浪の井せんへれのもうえやう後患。
松の木の青せよらせば暮浪は河ふるるれともす
後後松の木のえりわの葉も松の葉くづれもひふすら
松がえふるる暮(毛)ふるにゆて候るもとどける
自又小ゆる暮の不(ト)らふけの根どりの暮れどきをうち
暮波はらはよつてくらむらむとくふわまとく
古くあるてゆく人ふ暮の夜もあれも松れどきより
後暮くともとくらぬの立ちゆびれどくとくやう
一とみゆくとくべ暮花いとまくるまくせん角は
さまきはるもとくとくらぬて候暮の匂ひかくとくまく
月とくとくらぬ暮浪のたまく河をくまく
代りて暮えまくはまくあ代とくとくらぬ暮浪のれ
われもわてまくとくらぬ瀧つまくまくまく
家隆

抑頃之稿

陵
文
氏

蘇子久詩

卷之三

春心莫可
易蕩思懷

良暹

大文典傳

維亮

入後二品聖

卷之三

皮毛

卷之三

10

宦春

卷之三

後漢書

卷之三

卷之三

卷之三

卷五

春下三十二

年一精事

代々うく見る壁がまくあきべもへとよつてあきよ
代えどもかうす春とくらむれなまくとまくわ
日はいはゆるに端をひはくせだよとまくぬるの事
後進

読人不知
重之
さゆる

儀式精事
家主精事

後進
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
前進
代えども多の所さへゆる事もくわねうとくもり月日よ
内大臣
代えども多の所の事もくらとくはくく精す事
内大臣

後進
内大臣
内大臣

筆端着

端末お駄

日はくの事の事もくらとくはくく精す事
内大臣
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
前進
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
内大臣
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
内大臣

後進
内大臣
内大臣

精事筆
精事筆

日はくの事の事もくらとくはくく精す事
内大臣
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
前進
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
内大臣
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
内大臣

後進
内大臣
内大臣

精事

精事

後進
代えどもかうすへもハ極の是もわねうとくもり月日よ
内大臣

後進
内大臣
内大臣

三月夜
晴三月夜

王序卷之三

乙未年
仲夏之月考

之説有失
故鄉三月也
山家二月也
閩之月盡
之月也

卷之三

文政
元年正月
清衡
祐誠
家達
李慶
良園
笠之
久
建保
長家
室房

泰山風
東嶽
天子之廟
齊
封禪

卷之六

躬恒
貫之

全
卷之三

之衡

謀略

寶文

卷之三

其基氏

春櫻
老鶴

卷之二

卷之二

卷之三

代をもよおすものと見て取れ

西行

卷之三

通志

二
一
九
五

齋宮女御

作者不知

卷之三

長家

卷之三

顯神

卷之三

10

國志

卷之三

後漢書

叔蓮

頭基

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

同上

人魔

柳文式ノ

卷之三

卷下三十七

卷之三

夷閣錄

社頭屯

都
春

里毛

卷之三

姜閩居
華山居

山家春興
萬葉
美田家
隱居

春橋

卷之三

古事記の事はあらうと考へ
やし里小波さあるに極氣足にすがれとせんをもる 貫之
あすまくわふきとれのひのうる 球也たす
あぢういわふくとくふきんばとおもふを連づらる 读今も
結れもと萬代かふまをち お産てまうも小山翁 小丸也
花くわいがいぞおもるるをがく まうれと西川也と 未見
後指、小山翁とくまと山川へまわり おもむきまうり 小翁
あくと山のち本のち浦のちじだといひとじたえ
自ももて殊のれときも小山翁のものひへ産や年季 好思
代えくもわゆのとゆべぢく まづのあくまをくる 俊惠
日もくもどくとくとくね小室家のみへ新と続り 佐
月ものひね松おうきくさひのきくらむすみを 佐
羽毛をまわねまくらをかきくらまの橋立 佐
津はすくものひもとまくらをはらはらのあれも浪 佐

東風

風に

音海

津浦

風也ひ人ふをどく津の國へ耶波アマリの身アリと能因
 あらえをすれど津の國の難波の身アリと能因
 古根波は小咲や身の花を、さうとひもと咲や身の花
 桂木の花は樹の花ふをせそ桺。桺アリとせそ桺。桺
 王仁
 自律する桺の花はあやひゆきまくわ桺ふうりま
 後にくる桺の花を思へばとぞうめの足掛り室
 宗子
 后はるすまえひむかひの花をもあはる後今
 あらへてあらひとものはもうねふぞなげの花ひえ
 耶波アリとくもたれの花を約ひ處かのとせうひる
 うすすり小咲のあ葉をえほんの花はあらる耶波
 おれり居ぞる花をうれしとぞおれしとぞおれし
 おれをばせくおと帰ともあれもあらとぞおれし
 おれとおれの花を川と小い船子をよる耶波花
 日

卷之三

卖主

卷之三

月
月の花も桂の花の如くと青いまんまと
白いの大きくていまわる木ばかりでちかく
かがくのあらわらの神木としての森
木の花のやうなあさくわの黒いまままとい
代桜花をかきまじ黒のものややへばと
古きどりのじぶおじとておじとねじりて
まくれ花とてよしとせうの巣とておぢえ
月の花のとくわが生のいのとくわ
物壁へふかれてるよ花のとくわが
金、銀、銅、鐵の峰巒のねにあおりの花ふぞあうる
山林の花の波うねばわのまふぞあうる
白い木の花の波うねばわのまふぞあうる
良木柳は片葉小もと葉の種ふすめの花を
日
月の花も桂の花の如くと青いまんまと
白いの大きくていまわる木ばかりでちかく
かがくのあらわらの神木としての森
木の花のやうなあさくわの黒いまままとい
代桜花をかきまじ黒のものややへばと
古きどりのじぶおじとておじとねじりて
まくれ花とてよしとせうの巣とておぢえ
月の花のとくわが生のいのとくわ
物壁へふかれてるよ花のとくわが
金、銀、銅、鐵の峰巒のねにあおりの花ふぞあうる
山林の花の波うねばわのまふぞあうる
白い木の花の波うねばわのまふぞあうる
良木柳は片葉小もと葉の種ふすめの花を
日

故書局

卷之三

代
君もかずの後のみそめりとて
後桂
もとて、うるの林もどりて、
れ
ちゆゆくまねいとて、かのれ
日
がれまつて、

家長考

水經注

武部

卷之二

讀金言

讀人不熟

鵝

同
卷之三

同

四

毛思

東釋教
青神社
東海向
善院

泰山集

二月

三月
四月

代りの日も一月八日まであり其の後よりは少くおせも
つてさう夜もすこし風も多少ふ増るやうである
日はまだまづく朝へ終がきの月をあらむ
桜花もまだかな年才ふく人のいりあらぐせぬ
後わざりとぞそり(ま年才かともかくもどわづく
常よりとのどきとどきもあらば先かのわざり
左大臣

美濃

好

喜

入

喜

大

政

